新しい時代を見据えた先進的・先導的な高校教育研究

学校長　大谷　実

本校の研究紀要『高校教育研究』は第68号を数えます。本紀要は，本校の歴史そのものであります。終戦間際，わが国で第三番目に設立された高等師範学校である金沢高等師範の付属を母体とする本校は，その草創期から日本海側で唯一の官立の附属高等学校として，将来の我が国や世界をリードする人を育成することを使命とし，来るべき世界の動向を視野に入れつつ，高校教育の本来的な在り方や，先見的な，そして時には革新的な試みや提言などを毎年発信し続けてまいりました。本紀要は，公立・私立の高等学校とは異なり，研究推進校としての独自の役割を担うべく，実践家であり研究者でもある本校教員が，広い視野と深い見識に基づき，日々継続して取り組んできた研究と実践の努力の結晶であります。本紀要所収の論文は，経験的主観を綴った実践報告でも現実味に乏しい空虚な言説でもなく，直面する現実的な教育課題と明確な理論的視野を兼ね備えた，理論に裏付けられた実践報告，実践を導く理論的提案であります。附属高校の存在意義にかかわる本紀要は，グローバル化のただ中における教育改革の流れの中で一層重要性を増しているように思われます。

社会が多様性を帯び，急速な情報化や技術革新による生活の質的変化が激しい今日，新しい時代を視野にいれた高校教育の在り方が真に問われています。高等学校は，旧態然の教育内容・学習指導方法・評価方法・教育環境等を抜本的に再検討しなければなりません。そのためには，知識の質や量の改善に向けた教科・科目構造の見直し，課題の発見と解決に向けて「主体的・対話的で深い学び」を目指すアクティブ・ラーニングの視点を重視した授業改善，課題探求力や表現力に着目するパフォーマンス評価に代表される多元的評価の開発，ICTツールを活用した先進的な学習手法の研究等が喫緊の課題となっています。そのような課題に対して，先導的・先進的な教育研究を推進し，わが国のモデルを示すことは，国立の附属高校が担う使命の一つであります。本紀要では，平成23年度より自主的に開始した「学校改善プロジェクト」を継承・発展させた研究や，平成26年度より文部科学省から指定を受けた「スーパーグローバルハイスクール（SGH)」事業の主要な取り組み，特に，今回はその柱の一つである「教科のSGH化」に関する独創的な教科教育法や教材開発，さらには，次世代のグローバル社会を意識したわが国やアジア初の試みも含まれています。

さて，中央教育審議会が提出した「審議のまとめ」では，2030年の社会で活躍しその先の豊かな未来を拓くうえで大切な生徒の資質・能力を入れて，次期指導要領の改訂に向けた基本的な方向性や視点を打ち出しています。そこで重視されていることの一つは「社会に開かれた教育課程」と，その実現に向けた各学校における特色あるカリキュラム・マネジメントです。本紀要所収の各論文は，対象とする領域や分野こそ異なりますが，いずれも「社会に開かれた」ものであり，本校独自の教育課程の創意・工夫に満ちております。これからの高校教師には，将来の生徒に必要な資質・能力を視野にいれながら，学習活動を社会的に価値あるものとし，深い見識に基づく教育課程の編成力が求められています。本紀要が社会に開かれた教育課程のマネジメントの在り方に寄与し，さらなる研究を触発する一助となりますならば，これほど喜ばしいことはありあません。各論文に対しまして，読者の皆様からの忌憚のないご箴言やご批判を賜りますようお願い申し上げます。